

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

2回目の単身赴任を終えて

After my second time working away from my family

千野 靖正

2023～2025年の2年間、単身赴任のかたちで産総研（産業技術総合研究所）つくばセンターに勤務した。2025年4月より、産総研中部センターに復帰している。自身にとって単身赴任はこれが2回目であり、前回（2018～2019年）は東京（経済産業省）勤務だった。

単身赴任明けに始まる特徴的な日常として、自宅（愛知県岡崎市）から職場（名古屋市守山区）まで90分以上かけての通勤が復活することが挙げられる。地方勤務の人にとって、通勤時間90分以上というのは少数派だと思う。岡崎に居を構えたのは長女が2歳になるころであり、妻の職場がそこにあるからである。岡崎に引っ越すことにより、子どもの送迎は妻が、通勤の負担は自分が引き受ける分業が確立した。この分業の確立は、夫婦揃って20年以上、研究者人生を続けることができた大きな要因の一つになっている。また2回の単身赴任を家族が受け入れてくれた要因にもなっていると思う。

直接お聞きしたわけではないが、故北澤 宏一先生のお言葉が心の中にある。「夫婦が共に働いているのは生活（お金）のためだけではなく、お互いの人生の質をより良くするため。そのため（夫婦が共働きの状態で家庭を円滑に回すため）には、労（お金）を惜しんではいけない。」

先に紹介した通勤では、お金をかけていくつかの工夫をしている。公共交通機関（鉄道・バス）だけを利用した場合の通勤時間は約2時間となる。それを、職場の最寄り駅に月極駐車場を借り、駅と職場の往来に自動車を利用することにより30分短縮している。また、電車通勤の時間を有効に利用するために、特別車両券により席を確保している。

単身赴任の際にも労（お金）は惜しまなかったと思う。ほぼ毎週、金曜日の夜（子どもが起きている時間）には新幹線で岡崎に帰り、土日に家事全般・家族とのコミュニケーションを満喫したうえで、月曜日の始発でつくば・東京に戻った。1回目の単身赴任の際には、週1回の家事代行サービスを利用したりもした。週末の自宅への行き来は、単身赴任先の業務を忘れてほかのことに専念する、良い気分転換にもなった。

話は変わるが、夫婦で研究を継続しつつ2人の子育てをするうえでもっとも重宝したのが、妻の研究所の敷地内にある保育施設である。生後57日から満3歳に達する日まで、平日の朝は8時から、夜は19時まで預かってくれる。我が家の2人の子どもも、生後57日からお世話になった。聞くとところによると、この保育施設は3つの研究所に配分される運営費の少くない金額をそれぞれ拠出することにより運営されている。北澤先生のお言葉は、夫婦のことだけでなく、研究機関の運営にも当てはまるのかもしれない。



東岡崎駅にて

単身赴任婚

Working and living away from spouses

芹澤 愛

仕事に邁進していたところ、ひょんなことから結婚することとなり、そこからマイノリティであると感じさせられる局面が増えました。お互い仕事最優先の半生でしたので、いわゆる職住近接、通勤時間は最小限にしてそのぶん仕事に充てていました。仕事の都合が合えば週末に会うといった結婚生活で、出張も多く出張先で落ち合うことも。お互い単身赴任のようなスタイルで、別居婚ではないし（あえて別居を選択しているわけではない）、単身赴任婚と称していました。

思い返せば、前々職のアメリカの国立研究所では、様相がまったく異なりました。時折公募に対する候補者のインタビューがあり、インタビューには私のようなポストドクにもレビューを求められることにも驚きましたが（グループメンバー全員との面談時間が設けられる）、それ以上に驚いたのが、配偶者とお二人セットでのインタビューが多いことでした。家族はあたりまえに一緒にいるもので、キャリアを個人ではなく夫婦単位で考える、採用側も配偶者とのセットで判断するといった根本から異なる文化に、こんな選択肢があるのかと衝撃を受けたことを覚えています。一方、日本では、いくつかの大学で先駆的に配偶者帯同（夫婦帯同）雇用制度が設けられているものの、このような公募はごくわずかで、さて結婚したから異動するかとはなかなかならない世界でしょう。

定年まで単身赴任婚が続くかと思っていたところ、昨年、待望の子どもを授かりました。さて、単身赴任婚はどうなったか。答えは、継続中です。男性側からしたら、結婚や子どもの誕生を理由に異動するなんて多くは想像もしないか、あるいはしたくても状況が許さないのではないのでしょうか。私自身も、異動はもちろんのこと、なにより、研究室の学生を手放すことは考えられませんでした。子どもが生まれると自治体の手続きが急増しますが、我々は別姓を選択していることもあって何一つ円滑には進みません。日本には、少数派な事例を許容する制度はあまりなく、夫は子どもの父親ですが出生届すら滞りなく受理してはもらえませんでした。結婚、そして妊娠・出産を通じ、日本は選択肢が極端に少ない、古からの慣習や価値観をなかなか変えようとしにくい世界だと痛感します。遠からぬ将来には、私のような生活スタイルが一般的ではなくともさまざまな選択が自由にできる社会となることを思い描きつつ、最善の生き方ができる選択をされる励みとなれば幸いです。



ごく普通の家族です